

# 薬物依存者の復帰支援NPO

## 「名古屋ダルク」

### 20周年の危機

今年五月に設立二十周年を迎えた、薬物依存者の社会復帰に取り組む特定非営利活動法人(NPO法人)「名古屋ダルク」(名古屋市中北区)が、存続の危機に立っている。行政からの補助金や寄付金などで運営しているが、慢性的な資金不足に陥っているため。乱用防止の講演を行うなど社会的な役割も増しており、名古屋ダルクは「力を貸してほしい」と訴えている。

「ひとりぼっちだった」「人を裏切り続けてきた」…。薬物におぼれた男女が心の中をさらけ出し、自分と向き合うことで薬物依存から抜け出すきっかけをつ



かむ。こうした「ミーティング」が、名古屋ダルクで、住宅街の一角にある、築

タルクでは薬物依存者らが集い社会復帰を目指しているが、資金不足が悩みだ—名古屋市中北区の名古屋ダルクで

・センターの頭文字を組み合わせた造語で、民間の薬物依存症リハビリ施設。現在、全国に58施設がある。



ツグ(薬物)・アディクシオン(病的依存)・リハビリテーション

タルク(DARC) ドラ

数十年の平屋が活動の場。雨漏りもする二十畳ほどの空間に、布が擦り切れたソファや机が置かれている。

名古屋ダルクは一九八九年五月、東京のダルクで活動していた外山憲治さん(五)が設立した全国一番目の「ダルク」。現在、全国各地にあるタルクは、それぞれ独立運営で、外山さんはその後、岐阜市や津市、愛知県豊橋市にも設立した。

活動は、ミーティングや運動が中心で、体を鍛えながら薬物と手を切っていく。名古屋ダルクは通所施設のほかに、同区内に「入寮施設」も持っており、男性の利用者が共同生活も送っている。

代表の柴真也さん(三三)に

## 慢性的な「来月以降の運営費ピンチ」

よると、運営費は職員二人の person 費や家賃、活動経費などで年間約千八百万円が必要。通所は無料のため、市の補助金一千万円と寄付金で賄っているが、不況の影響などもあり寄付金が目減り。昨年度は百四十万円の赤字だった。柴さんは「七月からの運営費の確保の見通しが立っていない」と窮状を訴える。

自らも薬物依存で、タルクで薬物と手を切った経験を持つ柴さんには、学校や刑務所からの講演依頼が舞い込むが、「謝礼金も運営の足しにしている」と言い、「これまでも多くの依存者らがタルクから社会に復帰していった。受け皿があれば助かる命もある」と、支援を呼び掛ける。

名古屋ダルクは二十八日、名古屋市中北区の北文化小劇場で、設立二十周年の記念フォーラムを行う。問い合わせは名古屋ダルク 電話052(915)7284へ(ミーティング中の午前十一時は不通)。